

中東・中央アジア地域研究分野

国際環境・地域環境学講座、
中東・中央アジア地域研究分野の活動報告

教授
木村 喜博



本研究分野では、これまで、当該地域の人間社会が、これら人間社会を構成する諸要因（内的・外的な政治的、経済的、社会的、思想・文化的諸要因や人間社会が依って立つ自然環境）によって、どのように変化してきたか（人間社会の生業システム、社会・生活システム、思想・文化システム）を総体的に理解する研究を経験・実証的に行っている。

その際、これを他の社会と比較しながらこの地域の特徴



キルギス共和国の雪解け水による山岳の貯水ダム。水門からパイプでウズベキスタンのフェルガナ盆地へ流水される。



オマーンのスルタン・カーブス大学の汚水浄化層

と将来の方向性を論ずることを念頭においています。例えば、自然環境（気候・風土、資源の存在と利用、災害など）、政治紛争・衝突、社会・文化的差異（民族・部族、宗教、言語、慣習）技術とくに情報技術の発展が人間社会の構成（政治環境、経済環境、社会・文化環境）とどのように関わっているのか、または関わっていくのかについて研究を展開している。



ウズベキスタン、タジキスタン、カザフスタンを流れる国際河川シル・ダリア川の起点（2源流の合流点）



ミネラルを含む温泉水を利用したサナトリウム治療（ウズベキスタンのフェルガナ盆地）

[今年度の中東・中央アジア研究分野における活動]

I 中央アジアの環境問題に関する共同研究の継続

昨年度末から発足したこの共同研究は、中央アジアが直面する「環境問題と人間・社会のセキュリティ」という課題について研究を実施している。この研究は中央アジアとの共同研究ですが、そのうちウズベキスタンのタシケント国立経済大学（部局間協定校）の研究者の研究活動が、

東北大学で開催された11月27日の国際ワークショップ“Environmental and Health Risk for Sustainability in developing countries”で発表された。

II 「アジアの環境問題に関する研究ネットワーク」の構築

昨年度から、アジア地域、とくに西アジアとインドとの環境問題研究のネットワークを構築している。今年度は、インド工科大学—ボンベイ校（大学間学術交流協定校）との

(構成：教授1名、前期2年の課程の院生4名、後期3年の課程の院生6名)

交流を継続し、経済学者と社会学者を上記のワークショップに招聘し、発表報告を通して交流を深めた。また、10月下旬から11月上旬にはエジプト、オマーン、アラブ首長国連邦を訪問、また12月上旬には国際交流基金の委嘱によりクウェート大学で開催された社会科学シンポジウムで「環境とヒューマン・セキュリティ」教育プログラムについて発表を行った。その結果、湾岸諸国の環境リスクとセキュリティに関する研究の現地視察と研究交流について意見を交換し、同問題に関する研究者のネットワーク構築を行ってきた。

III 「ヒューマン・セキュリティと環境」教育コースへの参加

昨年度から開講した「ヒューマン・セキュリティと環境」コースへ新たに修士課程と博士課程に1名ずつ入学した。学生の研究対象は、環境リスクとくに産業廃棄物と社会変化、社会的構図における女性の地位、自然災害に対する有機



ジゼル利用の灌漑揚水機（サーキヤ）から出る灌漑水を使って洗濯をする女性（エジプトのナイル・デルタ）

的な社会的組織・人知、などをヒューマン・セキュリティという枠組みで研究している。学生は日本、ウズベキスタン、イラン、コロンビアと異なる国から集まっており、それぞれ自国または他国のヒューマン・セキュリティをケースとして取り上げ意見交換することにより、また他の研究科の学生・教員との研究交流を通して、新しい研究対象に対する学際的なアプローチや問題理解の方法などを研修している。

IV 他研究科への教育協力

大学院国際文化研究科のイスラム圏研究講座に教育協力を行っている。そこで、後期3年の課程の院生3名と前期2年の課程の院生1名の研究指導を行った。後期3年の課程の1名は、日本学術振興会特別研究員（DC）に採用された。

V 院生等の研究活動

- 1) 油井美春（学会発表）
 - A 日本国際文化学会・第五回大会（2006年7月）「現代インドにおける経済発展とコミュニティ対立—マハラシュトラ州ビワンディー市の事例から—」
 - B 日本南アジア学会で発表（2006年10月）「インド西部ビワンディー暴動の社会構造分析—スリム・コミュニティを中心に—」
- 2) 高畑祥子（学会発表）
 - A 日本中東学会第22回大会（2006年5月）「オスマン帝国末期におけるミッション・スクールの役割：ロバート・カレッジ学長の回顧録から」
 - B 日本国際文化学会・第五回大会（2006年7月）「ブルガリアとミッション・スクール（19世紀末—20世紀初頭）」
- 3) 浅村卓生（論文、現地調査）
 - A 浅村卓生「アラビア文字からラテン文字へ—ウズベク語表記の変遷—」町田和彦・菅原純編『周辺アラビア文字文化の世界—規範と拡張③—』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）pp.29-71、2006年3月
 - B ウズベキスタン共和国国立公文書館および国立図書館（現地調査、8—9月）
 - 北海道大学スラブ研究センター（資料収集、6月）
- 4) 国連大学グローバルセミナー参加
 - ルダコヴァ・カミーラ（金沢セッション）、勝俣梨穂子（弘前セッション）、マスーメ・ラメザニ（神戸セッション）、オスカル・ゴメツ（小樽セッション）
- 5) ルダコヴァ・カミーラ（海外調査等、2006年8月～9月）
 - ウズベキスタン共和国のチルチク市やタシケント市で資料収集と実地調査。
- 6) 木村喜博（国際シンポジウムでの発表、於クウェート大学）
 - クウェート大学社会科学部第3回国際シンポジウム（2006年12月）「新しい教育プログラム：社会科学と他の諸科学の統合の試み」
- 7) IRES series（国際環境・地域環境研究シリーズ）No.1；Kakhramon Islamov, “Agriculture and Water Pollution Problem in Uzbekistan” 発行（3月）